美紗の会 たより

時と間のはざまで

西松 布咏

昨年を振り返るとせわしく時間を追いかけて「夢か現かうつつが夢か覚めて〜」と…まるで古曲の一節のような毎日であった。

穏やかな日差しのさす元旦の朝、今年は少しゆったりと日記を綴ってゆこうと友人が編集した「旧暦日々是好日・日記」をめくると今年は珍しく節分と新月が重なり二月三日が旧暦元旦にあたるとある。

古く日本のトキは神秘的な領域とかかわっており、時「トキ」とは休日や祭日を意味しそれ以外の日常を間「アイダ」とよんでいた。「時間」はこれを一緒にしてしまった近代用語だと言う。そういえばいつしか私も時間を一つに捉えて考えるから過ぎ行く月日を忙しく感じていたのかもしれない。私の日常をこれに当てはめると「アイダ」は日々の稽古。「トキ」はその成果を発表する舞台。

その繰返しのはざまに、刻々と移りゆく自然や日々の行事に身を置くことが大切でありその積み重ねがあるからこそいつしか芸が深まり伝統というかたちになってゆくのだろう。そう思いながらもある時はその繰り返しが無駄のようで疎ましく又辛くもあったけれど今日までかすかな一筋の光に導かれるように歩んできた。

数年前から古流生花家元の故千羽理芳師のご縁で合気道川越支部に籍を置く武道家の方々と桜見物の交流が始まり、その宵にはお座敷で江戸唄を聴いていただくようになった。

一昨年は寒風吹く師走月に行われる納会に招かれ、道場での演武の終演後にその畳の上で江戸唄を所望された。素肌に道着を着た小学生が寒さをものともせず正座姿で三味線に聞き入ってくれたことは指導に当たった先生方に意外な驚きで受け止められたようであった。

昨年の秋。雲ひとつない青空が広がる好日。私の唄を武道に結び付けてくださった高島三郎師が籍を置く仙元館道場が落合駅の程近くに開設され、来賓として招かれた。真新しい百五十畳の道場に小学生から社会人、そして多くの父兄が集まり、式典の後で基本技や演武の数々が披露された。小学生が元気の良い声を響かせながらの基本技。伸びやかな肢体に凛としたかたちを身につけ相手と対峙する中高生。無駄のない動きでリズミカルに相手と一体になってゆく年配者の演武。そして最後に親和会・井上館長の特別演武の後で御祝義曲「蓼三番叟」を唄わせていただいた。

そして年末には再度、川越道場の納会に参加させていただいた。

最初は殺風景な広い道場で三味線を弾くことに違和感があったが何度か唄わせていただくうちに江ノ島の弁才天のお姿が浮かぶようになった。

以前「月虹の栞」(URL:http://www17.ocn.ne.jp/~misa5/nisimatu.files/gekkou.html) に書いたが、芸能の神様である弁才天が奉られている江ノ島神社には琵琶を手にした白く麗しい「妙音弁財天」の他に、八本の手にさまざまな武器を持った武士の守り神「八臂弁財天」も奉られている。まさにhermaphrodite(男女の両性質を持つ)神様なのだ。

陽炎を神格化した摩利支天はどのようにも変化してゆき、楽器だけでなくやがて猪の上で武器をも持つようになり武士の守り神になっていった。

恐れ多くも私が三味線と共に合気道を修行する方々の前で唄うようになったのもこうした神様のお導きかもしれない。

背筋を伸ばし正座して唄うことは日々の切磋琢磨による心が声になり音色になるのだから、心身を謙虚に鍛えてゆく合気道と相通ずるものがあると、何度か演武を拝見するうちに私の唄に対する思いと合気道精神の距離が狭まってゆく。

合気道は八百年以上も昔に生まれた古武術に源を持つ武術であるが、勝負を競うことなく無理のない自然な動きで相手を制する和の武道である。正座で相手を敬う礼に始まり日本舞踊や能にも通ずる凛とした様式美は、相手に勝つ為ではなく自分との対峙でありその繰返しの中で心身が磨かれてゆくことであると知った。

私が日頃指導をしているように唄は三味線を気遣い、三味線は唄が引き立つように糸を弾く。それにはお互いを思い遣り不則不離の距離を保ちながら耳を澄ませて心

をひとつにしてゆく。そこに無駄な動きや驕りがあるとバランスが崩れ美しい曲が生まれない。

今まで漠然と心に描いていたことが昨年は期せずして伝統芸とは文武両道を極めてゆくことに他ならないと体感することが出来た。

大野晋著「日本をさかのぼる」には「トキ」の語源は「紐をトク」「衣をトク」などの名詞形で「トク」は「存在するものがゆるみ流動してゆくことを意味する」動詞形であると説いている。

今年の年賀状には「兎のように耳を澄まして響き合う魂を唄いたい」と書いた。どうか無我の境地になり穏やかな心で周りの気配とひとつになって唄ってゆけますようにと。

これからどのように歩んだらその心がゆるやかに流動してゆくだろうか…

それには名詞の「トキ」を動詞の「トク」にするべく唄い続けてゆくしか道はあるまいと思う。

ラフカディオ・ハーンと三味線

福武 正廣

門づけ(ビゴー筆)

ハーンは「耳無し芳一」に代表される怪談で有名であるが、その他にも明治期の日本の美しさを表した多くの随筆を残している。その中に一度読んだら忘れがたい印象を残す話しがある。「門付け」と題される一文だ。有名な文章だが、冒頭部分を要約すると、「当時神戸下山手通りに住んでいたハーンの家に瞽女（ごぜ）が門付けにやって来た。二人連れで身なりは百姓のなりで、頭に青い手拭を巻き付けている。近所の老若男女、さらに客待ちの車夫達までも家の前に集まり、門口は人で一杯になった。女は戸口の踏み台に腰をおろし、三味線の音をあわせ合の手を一節弾いた。その醜い引きつったような唇から奇蹟のような声が、言いようのないしみじみとした美しい声が波のように湧き出して来た。やがて聴いている人たちは、声もあげずに泣きはじめた。もちろんハーンには歌の文句はわからない。が、日本の生活の苦しさ、悲しさ、美しさがハーンの心に通ってくるのを感じた。そして忘れられた場所と時の感覚が、人の記憶にある場所や時の感じとはまるで違ったもっと霊的な感情とまじって、静かにやって来た。……門付けが去ったあともずっと、声はまだ耳もとに残っているように思われた。」

以上のような書き出しでハーンの記憶に残った様々な声についての考察が始まる。

因みに、ハーンは三味線のことを勉強し、西洋音楽と日本音楽を比較することから、本調子、二上がり、三下がりなど学術的にも優れた記事を外国の新聞に発表もしている。

さて、「門付け」に戻って、当時の無学な人びとを感興極まり嗚咽せしめた瞽女の歌声が、言葉もわからぬハーンをも感動させたのは、ハーンが単に感受性が強いとか日本のものに興味が有っただけのことではない。良く知られているようにハーンはギリシャに赴任した英国海軍士官と地元の名士の娘との間にできた子である。生まれはイオニア諸島の島で、二歳までそこに住んでいた。そして父の転勤に伴いアイルランドに移り、四歳のとき母が精神を病みギリシャに帰って、その後終世母とまみえることはなかった。後年ハーンは「自分の精神は全てギリシャから来ている」と述べているように、彼の地への強い郷愁と母への押さえがたい恋慕の気持ちを抱いていた。

音楽学的に言うと、古代ギリシャの音階（テトラ・コードの中のイオニア旋法に代表される）は日本の音階と極めて似ているらしい。ハーンは瞽女の歌声に遠い日に耳に残ったギリシャ人の母親の声を聴き、生き別れた母の姿を垣間見たのではないか。瞽女の奏でる三味線の音とその超絶な歌声にハーンの母への懐かしさや別れた悲しみが共振したのではないか。

小生の学生時代、フランス語を習い始めて発音練習をする時、どうしても発音できない音がある。なぜかと考えた結果、おそらく自分が発音できない音は自分の耳に聞こえて来ないのだろうと思った。何回も練習し徐々に発音できるようになるにつれて自然と人間の声として聞こえて来るのである。

小唄を習い始めてから、再び同様な感覚を味わっているが、閑話休題。人間の気持ちや心に共鳴し共感できるのも、自分の中に同じ想いが存在するからだと思う。

もし布咏師匠がギリシャで演奏されたなら、きっと現地の人びとの奥底に眠る人類共通の儚い気持ちを目覚めさせるであろう。そしてそれが、没後百年経ってやっとハーンの心が三味線の音色に乗ってギリシャに還ることになると思うのである。

なにわのコラボは「夢のまた夢」

荒木 基次

平成二二年二月二二日というゾロ目の日に、東京は文京区の実相寺で催された「貞女の夢 儚」。女の情感たっぷりに文楽と江戸唄のコラボレーションだった。

その成功に気を良くしたプロデューサー藤澤氏が「大阪でも出来ませんか」と声をかけてこられたのは夏の暑さが厳しくなる前だった。「はい、大丈夫でしょう。」と安請け合いしたら、あっという間に極暑の八月が過ぎ去っていった。九月から配り出したチラシが人気上々なので安心していたのだが、日が迫るに連れて予約が伸びない。これが大阪の反響かとかなりめげる。なんとか集客に励み、知人・友人・親戚一同を集めまくった。

本番当日、集客の悪さに嫌でも肩身が狭くなる。三時を過ぎる頃、義太夫の咲甫大夫と三味線の清志郎くんが「おはようございます」と楽屋入り。

咲甫さんとは以前から顔見知りだったが、清志郎さんは舞台を見る以外では今回が初めて。「文楽花形少年隊」のころは、イケメンの遊び人なんだろうなと思っていたが、会って喋ると、ひじょうに真面目な好青年。今回も一人で、ぎりぎりまで黙々と調弦していた。

やがて、勘十郎さんら人形遣い組も登場し、リハーサルが始まる。音響は能楽堂なので申し分無し。橋懸かりからの登場も、何度も能舞台を踏まれているので「ああ、大丈夫です」の一言で決まる。楽屋でモニターを見ながら、指で橋懸かりを追ってシミュレーションされていたのが、カッコ良かった。今回の左遣いは吉田一輔さん。脚遣いは吉田勘次郎くん。

撮影・桑島秀樹

■ビジネス街の能舞台

今回、仕事終わりでも駆けつけていただくように、開場を午後七時にした。ふと玄関に出てみると、もう会場の外で並んでおられるお客様が居た。プロデューサーに「もう、待ってはりますよ」と伝えて、開場を5分早める。それでも七時一〇分頃には九割方が埋まる。席はゆったり目に作ったので、この時点で、見た目はほぼ満席状態。なんとか人心地が着いた。十一月はさまざまなイベントで食い合い状態だ。やがて五分前の影アナ。客席の扉を閉めて、開演を待つ。

西松布咏師匠と咲甫大夫、清志郎さんたちが切り戸から揃って登場。とうとう始まってしまった。こうなれば、もうこちらは「まな板のコイ」。

扉の外から舞台を覗き見ながら、遅れて来る人に対応。扉の外からでも布咏師匠の澄んだ美しい声と咲甫さんの迫力ある浄瑠璃がびんびんと響いて来る。観客はもう舞台に釘付けだ。ここまでくれば、もう大成功。

橋懸かりから「お園」が登場し、観客の目が注がれる。通称「酒屋の段」。「今頃は半七さん、どこにどうしてござろうぞ…」と夫の不在をしのぶお園のクドキ。昔は子どもから大人まで知っていた。私の小さい頃でも父の帰りがちょっと遅いと「今頃は半七っぁんやな」が母の決まり文句だった。

続いて「桂川連理柵」から「お絹」。落語にも出て来る「お半長」だ。お半は十四歳、長右衛門は四十四歳。これが恋仲になり果ては心中に至る。布咏師匠の華奢な姿からは想像出来ない低く良く通る美しい声と、咲甫さんの声を振り絞っての浄瑠璃。観客はもうどっぷり世界に入っている。

地唄と浄瑠璃のみの「お絹」が終わって、ここで休憩。廊下に出て来られたお客様にトイレの案内をしながら感想を聞く。みなさん、大満足気。もう大丈夫と、ほっと心を落ち着かせる。

撮影・桑島秀樹

■地唄に浮かぶ白き「かしら」

休憩後は勘十郎さんの「文楽人形のお話」。電気を消した二階席から山本能楽堂の奥様と一緒にこっそり鑑賞。「後ろ振り」の難しさを語られる。文楽ファンにも初心者にも人形遣いの難しさが良くわかるお話。人形無しで「三人遣い」や「後ろ振り」の型を解説。まるで人形があるかのような三人の動きは見事というほかない。文楽の奥深さに、観客は感心しきり。

もう遅れてくる客も無さそうなので、三つ目の「橋姫」は、観客席の一番後ろで鑑賞。これは能の「鉄輪」からの創作。文楽には無い。橋懸かりからの「橋姫」の登場は、能を想像させてぴったりだ。お姫様の長い髪と豪華な打ち掛けは、きらびやかだが遣う方は重くて大変とか。布咏師匠の低音から高音までの伸びやかな唄声で、どんどん物語世界が加速して行く。三味線のテクニックも千変万化、ますます幽玄の世界に入って行く。気品ある橋姫が鬼に変わって、橋懸かりを消えて行く。観客の目は釘付け。

唄いきった感のある布咏師匠が三味線を置かれ、床と三人揃ってお辞儀をされたら、満場の拍手が来た。

アンコール的に勘十郎さんも登場され、全員でごあいさつ。観客はみなさんが退場されてもアンコールしたそ

撮影・桑島秀樹

うだったが、これにてお開き。みなさん、「いやぁ～よかったわ」「すごいなぁ」と満足げ。こちらも思わず顔がほころぶ。楽屋にも、一気に緊張が解けた中に公演成功の喜びが在った。

冬の夜に　かしらの白き　能舞台
艶やかに　姫の衣装の　舞台かな
松羽目に　白さ映えたる　かしらかな

舞台としての空間

千葉 貴司

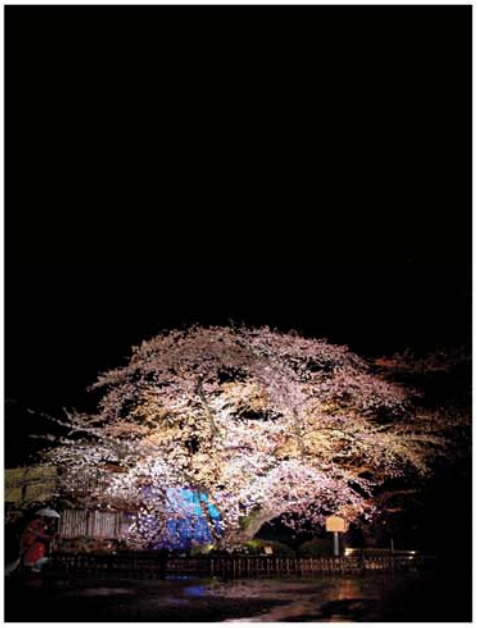
津軽・弘前生まれの私にとって三味線と言えば津軽三味線が幼い頃からのなじみの音でした。べべ～ンと豪快に弾く「叩き三味線」は弦楽器と言うよりは、むしろ打楽器で、最近はリズミカルに叩くだけのスコップ三味線もあるそうなので、やはりパーカッションの部類でしょう。そんな生い立ちのせいで（？）邦楽に関しては何の見識も無く、チントンシャン♪と繊細に爪弾く三味線の音を耳にする時、何となく風情を感じる程度でした。

そんな私にとって布咏先生の三味線と唄との出会いはまさに「未知との遭遇」でありました。鶴間茂登子さんとのご縁で屋形船にご一緒させていただいた時です。繊細な爪弾きと澄みやかな声の絶妙な「間」の向こうに、自分の意識が吸い込まれ、江戸町の情景が幻のように浮かび上がってくるではないですか。私当時、浅草の江戸町づくりに関わっていたこともあって丁度そのイメージとも重なったのかもしれません。「屋形船」以来、「軽井沢別荘」、「能楽堂」、「月心居」、「泉クラブ」といろんな場所での先生の唄を楽しみ、大変贅沢な時間を頂いております。そして演奏する舞台(場所)ごとの微妙なニュアンスの違いもまた新鮮な楽しみのひとつです。

その舞台についてですが、ご承知のとおり、舞台(ステージ)は一般的には客席とセットとなった劇場となっており、施設ごとに空間の大きさが決まっております。舞台美術、音響、照明などによって演目に応じた背景を象徴的に演出しますが、奏者と聴者との距離により臨場感が違ってきます。また劇場空間とは別に、奏者の一定の空間や場所（状況空間）をも抽象的な意味において舞台と呼びますが、劇場よりもリアリティが出し易いものと思われます。

そこで勝手ながら布咏先生に相応しい舞台空間を独自に妄想してみたいと思います。(余計な事をするなと怒られそうですが）まずは呼応しそうなキーワードを探ってみると「月映」、「簡素」、「清潔」、「薄明かり」、「静寂」、「気配」、「小宇宙」、「哀調」、「和美」、「揺らぎ」…。つまり谷崎潤一郎「陰翳礼讃」に記された、影を纏いはっきりと輪郭を出さないが、淡く醸し出す美しさ。そして空間の大きさは四畳半。客と亭主が相対する茶室のような濃密な空間。そんな舞台空間での布咏先生のイメージはちょっとドキドキしませんか？

そしてもうひとつ、写真は日本最古のソメイヨシノ（樹齢百二十八年）を春の舞台に立つ演者に見立て、特殊照明で演出したものです。テーマは「老桜幽玄」。これでまだ三分咲きですが刻々と表情を変え、艶やかに咲き誇る古木に圧倒されます。こんな舞台も布咏先生に如何でしょう。



《今後の公演予定》

●平成二十三年一月二十九日(土)午後六時 開演
浅草・ことぶ季亭
第一回 江戸唄と落語を楽しむ会
江戸夕儚噺（えどのゆうべはかなばなし）
唄と三味線　西松 布咏
噺　春風亭 正朝
舞　吉村 ゆかり

●平成二十三年二月二日(水)午後六時半 開演
グランドアーク半蔵門
第三回 蔦くらぶ 邦楽三昧
春を彩る　西松布咏の唄と三味線

●平成二十三年二月六日(日)午後三時 開演
岐阜・かわらや大広間
第七回 粋艶会のつどい
粋艶会一門唄い初めと新年会

●平成二十三年三月二十五日(金)午後七時半 開演
京都・初音館スタジオ
ダンス×音楽×映像「アジール」試演会
音楽　西松 布咏
振付・ダンス　寺田 みさこ
作・演出・映像　飯名 尚人

●平成二十三年四月九日(土)午後一時 開演
赤坂・泉クラブ
第四十一回 美紗の会のつどい
美紗の会一門演奏会と親睦の夕べ

■たより第68号
発行者　美紗の会
編集責任者　大久保 朋子
デザイン　近藤 幹則

■美紗の会
主宰　西松 布咏
稽古場　港区白金台三-二-二
白金台プレイス 三階
電話　（三四四一）一七二六
（五四四七）一四一二
E_mail：nfue@soleil.ocn.ne.jp
URL:http://www17.ocn.ne.jp/~misa5/